

近づくほど強まらず、
離れても消えないものがある。

それは、目立つことではない。
声を張ることでも、前に出ることでもない。

存在感と呼ばれるものの多くは、
足され、整えられ、保たれている。
けれど、華と呼ばれるものは、
その延長には現れない。

評価でも、好意でもない。
視線とともに生まれ、
視線とともに消えるものは、
ここに含まれない。

それは、
「あるように見せる」こととは、
位相が違う。

華は、外に出る強さではなく、
内側で戻らなくなったものの形だ。

混ざりきったものは、
もう名前を持たない。
選ばれたものも、捨てられたものも、
同じ場所に沈んだまま、動かない。

そこには理由が残らない。
ただ、残り方だけがある。

近づいても、増えない。
触れても、変わらない。
なのに、どこかに引っかかる。

それは、輪郭ではなく、
抜けたあとに残る重さに近い。

華は、持とうとした瞬間に軽くなる。
意識された途端に、別のものになる。

それでも消えないものがあるとしたら、
それはもう、
選択でも姿勢でもない。

戻れなくなった結果だけが、
そこに残っている。

近づけば際立たず、
離れても薄れない。

華は、
輝きではなく、
残り方として現れる。

残そうとしていないものだけが、

最後まで、残っている。

Edition — 存在の芯
別景：残るもの

著者：美学思想家 古川玲奈
発行：Raffiné
2026